

5. 若者へのメッセージ

これから先も「チーム・ヤスハラ」で会社をつづけてほしい

ヤスハラの将来を見据えたとき、調合師の育成は不可欠である。後進の指導にあたっている渡辺隆司氏は、調合師に向いている人をこう表現する。「素直な人。些細な違和感や疑問を見逃さず、すぐに相談できる人。自分で試行錯誤して行動に移せる人。」しかし、誰でも最初は失敗やミスからはじまる。だからこそ、渡辺氏がそうだったように、先輩たちに付いて基本的な作業を教わり、試行錯誤を繰り返しながらキャリアを積んでいく。一般に、調合師として一人前になるには、少なくとも10年を必要とする。

ヤスハラを背負って立つ若い世代には、「人と人との和を大切にしたい」と渡辺氏は言う。同時に、個々が主体性をもって仕事にとり組むことである。「和して同ぜず」、あの横田先生の言葉が思い出される。「あとはやる気というか向上心、頭の柔軟性が大事ですね。『^{ほうれんそう}報連相』をきちんとおこなうことが大切で、『チーム・ヤスハラ』を掲げ、一致団結してこれから先も会社をつづけてほしいですね。」



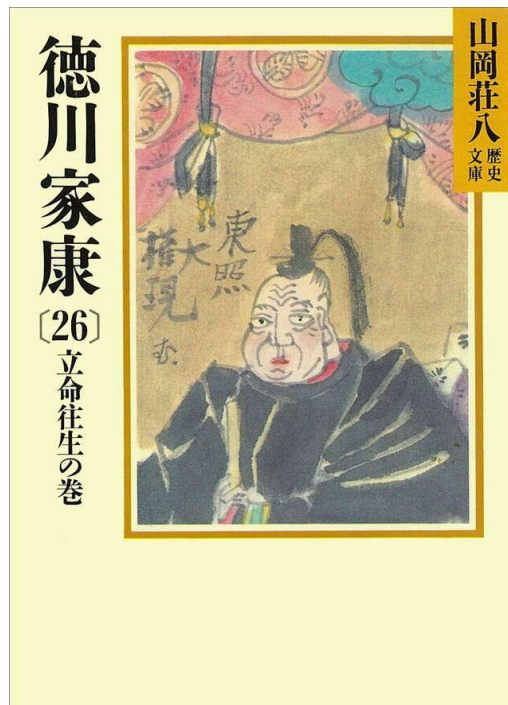
（株）ヤスハラ本社

（出典：株式会社ヤスハラホームページ）

6. お気に入りの本

読書をとおして、物事をみる角度やフィルターが変わる

渡辺氏は、中学校まで「週刊少年サンデー」などの漫画雑誌を愛読していたが、高校生になると講談社や角川書店から出版されている時代小説を読むようになった。なかでも山岡^{そうはち}莊八の長編小説『徳川家康』（文庫本 26 巻）はすべて読破した。



山岡 莊八『徳川家康』（全 26 巻）講談社、1988 年。

（今治市立図書館所蔵）

山岡 莊八は、1907 年に新潟県魚沼市に生まれた小説家であり、『徳川家康』を筆頭に、『元帥山本五十六』や『織田信長』、『坂本龍馬』など戦前・戦中・戦後にかけて数多くの歴史小説を遺している。戦中は従軍作家として各戦線をまわり、日本のために散っていった若者やリーダーたちの生き様を観察し、戦争を舞台にした小説も精

力的に執筆した。

『徳川家康』は、1950年3月から北海道新聞の夕刊に連載がスタートし、1967年4月までつづいた連載小説である。1953年から1967年に単行本が刊行され、その後文庫本としても出版された。渡辺氏が愛読したのは、この文庫本である。

1964年に同書を原作にテレビドラマ「徳川家康」（テレビ朝日）が放映され、1983年にはNHK大河ドラマ「徳川家康」（日本放送協会）が制作された。さらに、1968年第2回吉川英治文学賞を受賞し、韓国や中国など海外でも翻訳され、山岡荘八の名前は広く世界にも知られるようになった。

渡辺氏は、『徳川家康』をはじめ、いままで読んできた本をとおして物事をみる角度やフィルターが変わったことを実感している。しかし一方で、本のもつ影響力に危惧の念を抱いている。本は一方向の情報がゆえに、自分の好みの本だけを漁って読んでいたら思考や価値観が偏ってしまうのではないか、という心配である。

おなじ本を読んでも人によって解釈は異なる。これと似たような例として渡辺氏は、「お釈迦さんが開いた教えでも、受け手側によって解釈が違って、さまざまな宗派を生んだでしょう。人は、自分の都合とか好みとかに寄っていくから、そういうことに気を付けなね」と自戒の念を込めて言う。逆に、おなじような本ばかり読んでいると物事をみる角度やフィルターが固定化してしまう可能性もある。それをつねに頭に置きながら、特定の作家や特定のジャンルにこだわらず、渡辺氏はなるべく自分のなかでボーダーを設けず、さまざまな本を読むように心がけている。

（完）

（文責・インタビュー：辻智佐子）

参考文献

鈴鹿正和「最近の染料用コンピュータ・カラーマッチングの動向」

Japan Society of Colour Material, *Journal of the Japan Society of Colour Material*, Vol.65, No.11, 1992 年、700-710 頁。

編集後記

猛暑のつづく 2025 年 7 月 24 日（木）、渡辺隆司さんへのインタビューをヤスハラ本社にておこないました。ヤスハラへは今回で 3 度目の訪問となりました。2019 年 3 月 8 日（金）に安原史紀さんへのインタビューの際におじゃましたのが最初で、そのとき渡辺さんにも少しだけお話をお聞きしたのを覚えています。あれから 6 年半ほどの月日が流れ、安原さん亡きあと、ヤスハラ存続を願って老体に鞭打ちながらヤスハラを支えている渡辺さんに改めてインタビューできたことに感謝です。

普段はなかなかお会いできない職種の「調合師」ですが、渡辺さんをとおして、身の回りにある「色」のひとつ一つが調合師による丁寧な仕事のうえに生み出されたものだとなりました。調合師が表舞台に出る機会はなかなかありませんが、当たり前にあるものをつくっている人こそ、社会貢献度は高いものです。

ヤスハラが老舗企業に成長できた理由は、安原さんの経営者としての手腕にあります。渡辺さんのような職人の存在なくしては考えられません。中小企業が生き残る道は、こうした地道な人材育成にあるのでしょうか。若い世代がこの先のヤスハラの歴史をつくっていけるように、渡辺さんの指導は今日もつづいています。

次回の「タオルびと」

「タオルびと」の 44 人目は、平和金箴製作所の創業者・豊田兼光氏である。平和金箴製作所は、今治で唯一、昔ながらのシャトル織機や最新の革新織機の箴を製作しているメーカーである。タオル織機の重要な道具のひとつが箴であり、箴によってタオルの個性が生

み出される。次回は、平和金箴製作所と、いまは亡き豊田兼光氏について、現在同社の代表を務める豊田洋子氏に語ってもらう。

